



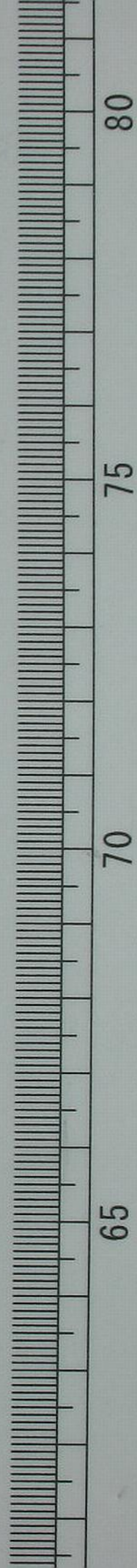
俗通

渡邊義方編輯

日本小史

第三編

上



65

70

75

80



A557  
5

染崎延房檢閲  
渡邊文京操觚

梅堂國政畫

# 通 俗 日本小史

東京書肆

金松堂發兌

48-8436

通日本小史三編の序

俗日本小史三編の序  
三寸の筆一寸の墨終日机より立ち向ひ浅き硯の海原より浅き智慧  
の杖据と漁る趣向ありあかき古き依温ぬく新ら  
綴りかえたる古今の沿革煩を省き要と摘み童幼婦女子  
を諳やましく解りやまると第一と及ぬ操觚の企てを三本足  
らぬ命毛の猿が人真似とやらかりやら筆搔きたる當編もオ  
チが来とやら大吉利市実入がよりうらモシ先生次編をよやくと板  
元が荒雨々々顔の居催促煽動らるるとありあがり急つて脱稿と  
三編の序文はハタと行詰り有の俤ある内幕の長稿條々娛退  
屈と早速本文始まり左様と娛譚下さりませり

明治十四年晚夏吉日

編者 文京述る

日本小史 三編





義仲粟津の  
原ろて流箭  
は當りて戦  
死の因



日本書紀  
三十一

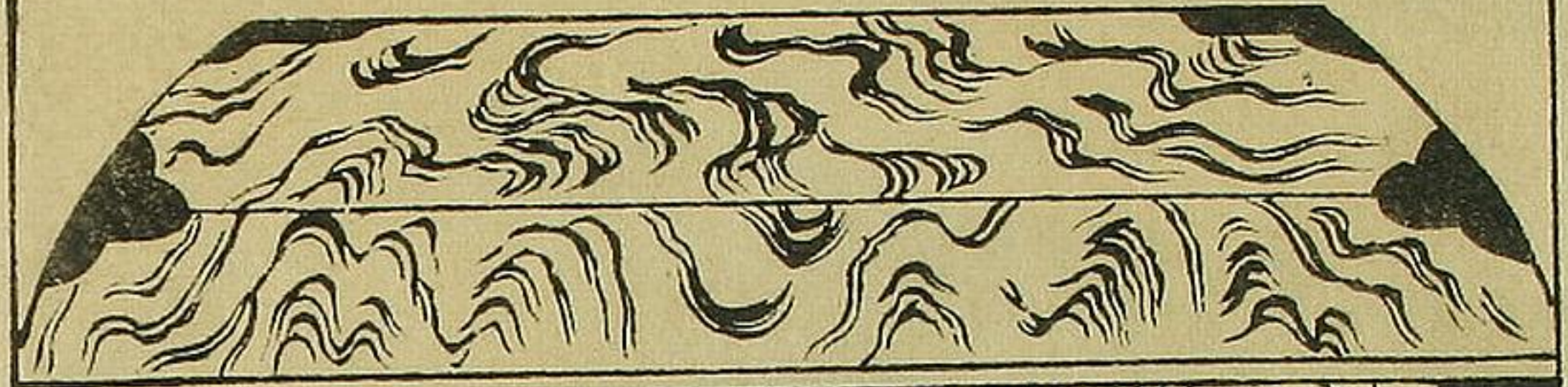




武藏坊辨慶

高橋新季恒補高





# 前

養和元年平の宗盛大挙して  
 義仲と追討の戦ひ敗れ源軍勝ふ乘り  
 長駈して京師に攻入るより宗盛安徳  
 帝を奉り奉り奉り西海に走るに終る

法皇義仲の兇暴を厭ひあをく頼朝を  
 召せより義仲頼朝不和を生ず遂に範頼  
 義経大軍を率て義仲と宇治勢多の戦争  
 果て栗津の役で義仲戦死の件も畢る

通俗日本小史三編之上

東京

深崎延房檢閲

渡邊文京操觚

却説清盛既よ薨せしうべ宗盛代つて政權を掌握し  
 威名ハ父よ劣らねど軟弱不才の愚將よして父清盛  
 似るべしものゆへ諸事決断の英氣よ乏しく夫  
 が為既よ大挙して源氏を追討の一議よ決せしゆ遂  
 に其終打ち得立む荏苒歳月を經過せりら養和元  
 年三月とあり東より頼朝北より義仲各々牙と磨ぎ



干と練り宇内を併呑さんぞ形況捨かたがと事  
 ふ一のまば陸奥の豪族藤原秀衡を陸奥守に任  
 頼朝と討しめんとせしと秀衡如何で従ふべき去  
 とて源氏は應さるふもゆゑと思ふ仔細の何とをふ  
 や局外中立の位置を占り断乎として動らぬを宗盛  
 今を傳へ越後の豪族城太郎資永を越後守に任  
 ト源氏を追討せしむ資永則ち兵六萬を將めて信濃  
 に入り木曾義仲と戦ひ利ありと退き再び英氣  
 を養ひつ其年九月平通盛等と兵を併せ義仲と討ん

と競ひ進む此方も期したる事を勝誇りたる  
 鋒先鋭どく敵の未だ来らざる間よ越前の國境ま  
 で逆寄るしつ挑と戦ひ平軍脆くも擊敗られ逃且志  
 くらふ敗走せしと尚懲を問よ太郎資永その弟四  
 郎永茂と供よ四方の大軍と引率し明れば壽永元  
 年春二月も消残る雪踏分け北國指て進撃せり  
 源軍僅よ三千騎よ満ぶ敵の大軍よ比ぶれを現し九  
 牛が一毛あるも後へ退ぬ勇將義仲常ふ寡とりて  
 衆と破る實地の進退間断なく兵を分ちし七隊と



一そが三隊と道の辺ある茂林のうち伏せ置て  
 餘る五隊の源軍の敵を欺く赤地の大旗おのく  
 陣頭は押立たるに幾流の數とあはれ徐々として  
 進み寄るに遙に眺望て平軍の味方あると思ふ  
 みぞ嘗て怪しむ者もなほ稍敵軍に近づけて距離  
 間近くなるよと見えしは是れも什麼も是れ如何  
 は赤旗と地上は仆まや否疾くも押立つ源氏の白旗  
 馬上は屹然と立ちたり兵毎進めと義仲が颯と振き  
 る采配諸とも動と叫いと五隊の軍兵面もあはれを

平軍の前後左右より突入り短兵急よ攻立られ思  
 ひ掛たる義仲が神出鬼没の妙策に驚き潰ゆる平  
 軍の中ふも大將長茂はなごれよあはれ崩れ立つ味  
 方と親ら言励まし稍その備を立直し多勢と頼  
 ん防ぎ戦ふ指揮よ油断のなるとあり己が手足と  
 使役が如く士卒と自由よ駈廻らる義仲が勇武に當  
 るべくもあはれ漸次くよ敗走る道の傍の茂林の中  
 より動と揚たる鯨波の声現われ出る一隊の軍兵逃  
 めく平軍が横合より無二無三よ突崩を是れ叶へト



と驚馬く前面へ又も現る二隊の軍兵天の降りり地  
 の湧りり往方の道を遮断て逃しつせと扱と撃  
 つ前後に敵を引受く抗戦たまき氣力もあく碎る  
 ちるに擊敗らる長茂僅に残兵を纏め命あらく  
 圍に依斬抜け漸やく越後へ逃歸り是に於て威風  
 と慕ひ北陸の各地の豪傑を競ふて義仲は属は実  
 ちるに兩雄併び立むと頼朝義仲相軌り互に確執と生  
 じたる事の起源を尋ぬるに初め武田信光その女を  
 以て義仲の子清水冠者義高に妻せんとその婚談と

言入るに小義仲の信光を侮り我家の源家の嫡  
 流家柄賤しき彼等が女と吾子の正妻とい思ひも掛  
 りむ左に婚儀を整へたくば娶て妾となさんのみ  
 と嘲弄され信光は怒り堪むや鎌倉に赴き義仲  
 の志をく戦ひようち勝る驕りの心を生じ我威と  
 北國に輝り平宗盛と連和して俱に與る東上り鎌  
 倉府を襲ひ撃ち宇内を掌握するの企望あり今の  
 内は川盡さむ斧と用ゆるの悔あらん能々賢慮あ  
 らまかりたむ詞巧し頼朝と煽動立たる諛者の佞弁



義仲連戦  
 一之城兄  
 弟と大よ  
 撃破走



日本小史  
 三編



日本小史  
 三編

七



素より猜気の性あれば頼朝あはれ信と一快よろ  
 お思ふ折りし叔父行家先つ頃美濃に在りて義兵と  
 拳げ平氏の軍と戦ひ一が運拙なきて合期せむ戦ひ  
 敗れて逃走り鎌倉より来り頼朝に依りその食邑を得  
 んと請ふ頼朝あはれ承諾を却つて強面く扱ひ一を  
 行家もまた怒りよ任せ訣別も告ぎ一て已が手勢十  
 騎と將て走せし義仲は歸を彼とつひ此とつひ快よ  
 うらぬ事のなると頼朝素より義仲が威望已に拮  
 抗する氣燦く思ふ矢先なれば撃亡せし後の患を

除くふあつと二年三月頼朝親ら十萬騎を將と  
 信濃に入る義仲將士を集めてその處置如何  
 を議するよ和を講せんと謂ふそのゆり逆へ戦を  
 んと言ふそのゆり就中四天王の隨一と仰ぐ義  
 仲が左右の腕とりたれたる樋口次郎兼光今井四  
 郎兼平俱に進んで議するやう佐公の猜忌ある今  
 よ始めぬ事よ一と患へと俱よまたく歡ひと供よと  
 べうらゆ殺免死して良狗烹られ頂王亡びて韓信誅  
 せらる今幸ひよ平賊を夷げ君素志を遂たまる佐



公必を嫉と恨とて禍害忽地踵と旋さん彼ら事と  
好むとそ又と得がた好機會味方の軍と押進り富  
部(地名)よ堅き壘と築き鎌倉勢と鏖殺しふり運よ  
叶るたる一挙は佐公の頭と得て威を海内よ輝り  
さる君が成業瞬く間何を猶豫とせしめんと詞鋭く  
説破せば併居る諸將も現もと勇と過半のあまは  
同意なせど何思ひらん義仲の腕又も眼と閉ぢ黙  
然として聞居たりし沈吟トク頭を傾け兼光兼  
平が議する処吾も爾思をぬらふめり孫とも如何な

れをらそ源氏の一族の父祖の代より骨肉相食の父  
と弒し子殺を國家の為といひる言ひるが實は浅猿  
しき慘状なりしや况や今も君父の仇たる平氏  
未だ全くと亡びを稍その素志と遂んとするは際し  
名もなき軍旅は骨肉の情愴と絶て抗戦なすは勝  
を負るも家の耻上へ帝室よ恐とり下萬民の誹  
謗さ人考ふまは後獲く彼戦ひは望むとも我  
敵とならば忍びざる何事も此肯心得よと言つ頻よ  
歎息を道理責たる義仲が事と好まぬ鶴の下敵



むら立ち騒ぐ迅雄と押鎮めつ兵と引き越後の國  
 へと頼朝が押寄せ来る鋒尖と當らむ禱らむ遊て  
 行く心の中を殊勝なれ斯と聞て頼朝も強て戦ふ  
 心をなく同トく鎌倉へ引返し使者と義仲が許し遣  
 ち一言まゝやう平氏の罪惡朝野は満ち我一族朝廷  
 の命を受け進發るさんとまゝ際何等の宿意あると  
 とら行家私し小兵と構へ頼朝と囚らんとせし候  
 下まゝ彼と庇ひ西と捨て東に向ふへ何事ぞや足下  
 若し他心なく速く行家と逐拂へよ否らざれむ

則ち足下の子と頼朝が養子とるし互ひは親睦の  
 意を表せんニッふ一ツ承引是よ夫さん聽はむを是  
 非もなう弓矢の沙汰も及ぶべし返答如何よと言  
 越せしと兼平兼光兔も角と志をく義仲と諫めし  
 うど嘗て其言と聽ぞ請ふるまふく子の義高と遣  
 へして人質とし和議漸やくは整のひぬさる程は平  
 家の方より再び大拳して頼朝義仲と追討せんと  
 維盛通盛忠度等と追討使と定め山陰山陽西海の  
 諸國及び參河以西若狹以南の徵兵十萬餘騎を將



と一先づ義仲と亡びて然る後頼朝も及ぶさんと  
 て北陸道より進撃なり頃ハ壽永二年五月十一日平  
 家の大軍十萬餘騎搦手の大將軍へ越前三位平道盛  
 美濃守平知度も追手の大將軍ハ小松三位中將維  
 盛左馬頭行盛薩摩守忠度等平氏の上臈敷をつつ  
 して志責猛卒雲霞のおとく礪並志雄の大路よりを  
 や越中の国へうち入ると聞えしうバ木曾勢ハ五万  
 餘騎義仲親も大將となり六動寺の国府より般若  
 野の御河端へ徐々と押菟たり相従ぐ人々より十

郎藏人源行家足利矢田判官代義兼楯六郎親忠字野  
 弥平四郎行平今井四郎兼平樋口次郎兼光根井小弥  
 太行親義仲の愛妾巴御前岡田冠者親義岡田小二  
 郎久義信越加北よ名たる勇將枚拳るみ暇りて其  
 時平軍ハ俱利伽羅堂国見俵馬場の堂ると彼此陣  
 と布くまき木曾勢ハ礪並山黒坂の北の麓埴生の八  
 幡林より松永柳原を後よりつ黒坂口を南に向ひと  
 整々堂々と陣たりたりかくて平軍へ進み来りて両軍  
 此処に相距るあは五六町より過ざりたり去と毛山



中嶮岨る疾視なりと扣えりその日かくて  
暮たると平軍切所依憑とらん敵も寄せと  
油断して盾と敷寐よ甲と枕よ睡らざるものなり  
五月の天の癖なれを朦朧よ下つて月影も夏山  
まげみ彌暗く源平互にふ咫尺と辨を神出鬼没の軍  
機微妙き義仲の豫て五萬餘騎と五隊に分ち牛四  
五百頭と集めて角よ松明と結びつひ夜の更ると  
ぞ俟ちて在り六の時樋口兼光の敵の搦手へうち廻  
り林富樫と相俱して中山とうち登り葎原へ推しせ

て太鼓と鳴し貝吹き立て樹の下茅萱うち運め  
らるる墓目鎬を射あがさせ関を吐と発するふん  
今井根井巴御前一萬餘騎を引率して関と合せ  
進みつ一度よ牛依断て放ち平軍の陣營へ追入と  
たりまよや田單火牛の故事今も爰に名將の智  
謀合期して牛ありとも不突て入るその勢ひ破竹の  
ごとくささぎも平氏の十萬餘騎不意を撃とく辟易し  
一柱もさぐえ得む加賀の國へ退や逃よと黑白も別  
ぬ黒坂の南谷を下るとく先陣深谷へ轉び落れば



後陣も續ついて落おちかきさるるを得えたりや應あやと義仲よしのぶの  
 采配さいはいうち揮ふり味方あつちと進すすめり透間すまもあらず追撃おひそ  
 を平軍人馬へいぐんじんば弥重やちかあり或あるは劍戟けんげき小臂こぶざうり或あるは巖いわ  
 石いしよりち碎くだれりさしも小廣こひろき南谷なんがと人馬じんばの死骸しがい  
 は埋うめり去さり依より後のちの谷やを地獄谷ぢごくやとも呼よび做な  
 せり去さの時源家ときげんけの一族いそ太郎重義たろうしげ同どうく小二郎久こじらうひさ  
 義等よしら比類ひるいたるは働はたらけり久義ひさよしの敵たきの上將かみしやう右兵衛みぎべゑ  
 佐為成盛さむねなりと引ひくんで遠とほまその元もとを取とり重義しげの平へ  
 家の侍士けのまじし館太郎貞康たねたろうさだやすと血戦ちけんして矢庭やまの敵たきとらち取と

ぬ爰こゝも岡田冠者おかかんげ親義ちかよしの敵たきの北きたと追おひ駈かつ俱利伽羅くりにがら  
 の傍わらりて美濃守みのもり知度ちとと半晌はんしやうのまを戦たたかふと乱軍らんぐんの  
 あとをなれば互あひひよ援たすけり兵士へいしも寄よれや組ぐみんと馬うま  
 乗のりちぐんと利手きでを取とり無手むでと組ぐみむ知度ちとの平家へいけも名な  
 だる多力たからの猛將もうしやうなるものうら戦たたかひ疲つかれて浅瘡あさでと  
 負かひぬ去されども攬うたる拳こぶしと放はなさば捨す拉らがんと揉も合あ  
 程ほどは暗くらき暗くらし切き所ところなり共ともに疲つかれて馬うまさへも踏ふ  
 足定あしまりあらずを崖岸きりぎし破やぶと踏ふ込こみらして両馬りやうばの主ぬし  
 を乗のりみぐる千尋ちゆんの谷やへ控かと落おちち人ひとと燈あきと踏ふ外とがして



親義知度と  
 血戦一組  
 たるまみ地獄  
 谷に墮て俱  
 戦死を





組だるまうふ脳と碎るは此彼齊一命を隕しと名を  
のこ高峯よ揚たりる小松の三位維盛の越中前司  
盛俊上總忠清等ふ救をれり加賀の國佐良ヶ嶽を  
る濱の邊に殘兵を集め安宅の渡しふ捷りて尚義仲  
を拒ぐ平氏の上將畠山重能前軍ふりりて彼方を屹  
と見渡せば砂烟りと蹴立て追来る敵軍既ふ近づた  
ぬ今此処に防がば油々しき大事と思ふゆを直ふ  
使を中軍に馳せ絆云々と注進し其身の自りし真先  
に駒乗出て木曾勢の来る後遅しと待つ間をどるく

義仲の先鋒樋口兼光勝不ありたる勢をひ鋭とく重  
能が軍と目覩て無二無三ふ突入りたり此方も流石  
名たぐる勇將両軍互ひし入乱と撃つ撃まら攻戦ひ  
未だ勝負も見え分ぞかち処に維盛の一軍宛ら大波  
の岩ふ當りて返さざるとく義仲と迎へて返り戦ひ  
矢叫び太刀音凄まじく木魂の響き天地ふ震き死を  
此一拳ふ決したる源平迭との奮撃突戦よせ手に返  
し返しては又寄来る軍の進退互ひし甲乙なれをの  
うし昨夜の戦ひ甚く疲れし平軍はいりて源



軍不あ當あるえ級え得えんあ暫あ一あハ防あきあ戦あひあ一あハ漸あ次あくあ引あ  
退あぞた刺あ違あくあて死あまあるあもあらあまあたあ自あらあずあ勿あれあ死あまあ  
多あもあらありあ勇あ將あ猛あ卒あ今あハあもあやあ過あ半あ戦あ死あなありあたあるあよあ  
り維あ盛あ如何あともあまあるあ能あるあ勝あつあてあ京あにあ歸ありあ上ありあぬあ  
此日あ齋あ藤あ別あ當あ實あ盛あもあ俱あはあ維あ盛あにあ從あづあるあ平あ軍あのあ  
うちあみあ在ありあ戦あひあ敗あまあるあ味あ方あのあ將あ卒あ先あとあ争あひあ逃あ  
走あるあ中あみあるあ戦あ死あとあ覺あ悟あやあ志あろあんあ突あ盛あ一あ人あ  
踏あ止あまあ一あ歩あもあ去あらあぬあ殿あ戦あ一あ當あるあふあ任あせてあ斬ありあ  
立あてあ難あ立あてあ右あ往あ左あ往あにあ暴あ廻あるあをあ憎あらあぬあ彼あ奴あがあ拳あ

動あかあるあ擊あ取ありあ具あ且あんあとあ源あ軍あのあ群あるあ中あよりあ声あ高あくあ  
そあまあるあ敵あ將あはあ物あ申あさんあ木あ曾あ冠あ者あ義あ仲あがあ臣あ下あにあ  
去あるあ者あらあとあ知あらあまあるあ手あ塚あ太あ郎あ光あ盛あとあいあ吾あ  
事あよりあ敵あ手あにあ取あつあくあ不あ足あハあらあずあまあトあ宣あ名あやあ聞あんあ  
見あ參あせんあとあ薙あ刀あらあちあ揮ありあ駒あをあ進あめあ擊あてあかあらあずあ  
物あとあもあせあまあ大あ口あ開あくあらあちあ笑あひあ吐あ露あたりあまあ小あ冠あ者あ  
ああ汝あ等あ如あきあ弱あ卒あにあ宣あ名あつあくあ聞あまあ由あ詮あああたあまあとあとあ  
首あ汝あふあ得あさあるあ程あふあ疾あ々あ討あつあとあ麾あもあ孫あ々あ大あ膽あ  
不あ敵あのあ廣あ言あにあ憎あまあるあとあ太あ郎あ光あ盛あ怒ありあとあ俱あ



一斬り込む刀先受つ流一つ虚々實々陽は開き陰  
ふ閉ぢ千變萬化の秘術を盡し前は頭をれ後ろふ  
隠き蝶鳥稻蟲の飛りよびとく一騎撃する晴勝負  
孰とも優り孰とも劣らん實盛もよる敵は得と  
りと心一歡とつあはふ撃とる死るをやと思へ  
を太刀筋自然と乱れ後ろの方へ峻巡くと蹠踉く  
とらるるを光盛は得たりと進入る手練の薙刀馬の  
前足斬拂ひ返る刀尖電光石火馬より控と落る  
塗炭實盛が頭ももさ敢なく下ふ斬落し戦ひ果て光

盛い誰とらえり孫ど是ぞこは敵一名たる猛將を  
らめと其が頭と義仲の實檢は供一且その為体を  
告るやう逃行く敵のそり中ふあゝの武者一人踏と  
止まり適晴微妙きその働らた京師勢よ候うへ  
ど其語音は東國訛り某姓名を問へど答へて吾が  
頭と木曾公は献せよ木曾公我を見認りたまふを  
其場よ至らるを自然心と知ると言ひ一のこか心當  
り候いおやとつふ義仲沈吟と樋口兼光を召  
して仔細と語り我思ふよその頭こそ齋藤實盛と



こを覺はゆと然れども實盛年七十と超ふたと  
 聞たるふ今その頭髮艶々として翠の色成添たる  
 をめて考ふれば夫の何れぬり心得むと眉うち鬢  
 めく疑ひの間は答へて兼光がさん候らふ是ぞと  
 疑ひもなれた實盛が首級は候らふたう討て死を  
 る覺悟ゆゑ諸君を態と告名がさるる臣嘗て実  
 盛と同トく東國に在り一時事の序に言へるま  
 かり白頭陣に從ぐり敵に侮慢を受るのみ萬  
 就ても不便なり我若事あるの日も邁るを髪を涅

て戦ひに臨むべし左なれた時に壯輩と肩を伍ぶ  
 こと成難しと物語りしも今も仇昔時の交義も敵  
 味方いま又かゝる陣中よく奮友が死首を見えんと  
 ひと思ふが臉をたゞき旧時を忍ぶ一粟義仲頻り  
 一點頭てそが頭を洗をせし兼光が詞は違はぬ雪  
 りと見擬ふ白髪と愛り果たる恩人の次女小義仲潜  
 然と落る涙を揮り拂ひ吾幼なくして孤獨とあり  
 寄邊ある身を憐れきて養ふに呉し其の翁志ざり  
 死得るの日も至らば父と事へて旧思を報んその



を思ひまや義と重んじて節は死せし惜みて  
と尚餘りある又と得ぬと稀世の英傑嗚呼死む  
たり悲しやと鬼神と欺むく猛將も恩義の二字と哀  
慟の胸と痛めて實盛が屍と厚く葬むつ跡懇篤よ  
弔らひしとぞ義仲連戦勝し乗り北を逐て近江  
路よりかの琵琶湖とらち濟り遂に進んで京師小  
入り比叡山に陣を布き長蛇の蛙を睨ふがぶとく  
た一呑し平族と掴み潰さん勢ひは宗盛痛くうち  
驚き族人を集めり議して曰らく今京師兵寡く

彼が鋭どん鋒尖に當らんあと思ひも寄らば依  
帝及び法皇と守護しまがせ西海に走りて而  
しは後再挙を謀らんと欲を此儀も如何ふと質し  
問ふその詞も訖らぬ間に進み出たる弟知盛辞雄  
々しく威儀と正し箇の阿兄の詞を心得む云  
をせよ知且しあとおがら抑々我祖桓武天皇始り  
て此地ふ都を建て平安城と稱えつ萬世不易の  
王城たり後我家降つて武臣とありしより今に至つ  
て八世の間未だ此地と一寸だも退き避けし事と



聞らむ假令源軍勇なりとも名と藉て世と騒がま  
國家の賊とりをまくのま箇をうまのせつてき小敵は戦慄怖  
まて逃隱とあへ自う禍害を招くふ齊一寧ら此  
地は決戦一腕の附根のゆるん限り太刀の目釘の續  
くたけ飽まで此所よ防ぎ戦ひ刀折と矢種の尽き  
まべ此王城の地を挑と一斃まて後よ已んのと左  
ゆるまやと眼と轉一一座と屹度見廻一つ花なり実  
ある勇將が詞ふ有理と教盛経盛齊くその議と賛  
成し俱ふ宗盛よ勸めしうと宗盛嘗てあまを聴ぞ

法皇親迎へ取らんとそ人と宮殿に遣はせしは何の  
間ふやら法皇のころや叡山なる義仲が陣営ふ御幸在  
くて藻技の売や空蟬の音さく絶てあうぞれを足は  
とをうま宗盛の大いふ望く成失るふのころ帝及  
び皇太后皇弟惟明親王が奉卜三種の神寶を推考へつ  
火を平氏の第よ放ちその子右衛門督清宗その弟  
新中納言知盛右中将重衡淡路守清房義弟式部丞  
清宗丹波守清邦叔父参議経盛中納言教盛薩摩守  
忠度経盛の子皇太后宮亮経正若狭守経俊教盛の子



日本書紀  
三編二

義と重ん  
びて  
実盛節  
ふ死を



日本書紀  
三編二





越前守通盛能登守教經從五位下業盛知盛の子武藏  
 守知章經俊の弟敦盛清房の弟維俊良衡故基盛の子  
 左馬頭行盛及び撰政藤原基道大納言平時忠等を率  
 りて烟りふ終る西の海九州さして落武者の運命傾  
 むく旗の手や寄邊渚の船路より沖合遙く漕去ぬ  
 是に於て法皇法住寺殿に還幸ましく義仲行家尋心  
 京師に入り平氏二百餘人の官爵を褫奪し頓て勸賞  
 行ふをれり義仲は左馬頭兼越前守行家を備前  
 守に拜任し平氏追討の院宣を下りたまふ世の人義

仲の偉功と稱して旭將軍と仰ぐ恐れは義仲の  
 鳳闕の守護として法皇の震襟を早くも休め奉つ  
 りしその忠その功莫大なりまよひ依りて官爵も大  
 方ありて進みたまふと法皇の睿慮短くして文も無  
 く武もなれぬ鼓判官知康等が舌頭を迷はされ果る  
 義仲と憎まされたまひて奏するよりと用ひたまふ  
 刺さる鼓判官を討て討めんと企謀たまひにおん  
 僻事より君臣互ひに鋒盾して不慮の狼籍を来し  
 ろる縁由と推せんとたへ安徳帝平氏に従ぐ西海ふ



落させたまひ京師に主たりて天子を立ん  
 せんと議し法皇親々此彼と日嗣の皇子と擇きた  
 らし折り義仲故に仁王の御子と勧め申し北陸宮と  
 と奏せし元と忘る忠臣の義理は怜し死直言な  
 り如何もなれを頼朝義仲相併んで東北より義  
 兵と起して平家と討し高倉宮が奮激して令旨と  
 諸源も布けばあり件の宮は如何もして驕る平氏  
 を撃亡せし王政復古をさしめんと慷慨の餘憤爰も  
 溢し義拳の魁せし宮の御運拙さくして事

迅くも洩し聞え頼政一族免道も亡び宮の流し  
 矢もかん身を射らして敢るく落命なりたまひぬ去  
 くれども頼朝義仲齊しく起りて海内と掃ひ浄めし  
 根本は高倉宮より出たり此等の理義も寄るといへ  
 北陸宮と御位も即たまふべき筈あるは法皇愛姫の  
 詞を用ひたまひ安徳帝のかん弟尊成皇子と以て  
 天日嗣も定めたまひ是と後鳥羽帝と為ま是も義  
 仲の意も適るる大軍京師に入里しと糧食乏し  
 き処より義仲の憤懣やる方なりたまき洛中洛外の



豪家と劫らる財と掠め金と奪ひて以て糧食と  
充て事と觸れつ荒々しき行状らる法皇も見  
つ聞つ既しちや義仲と厭ふの念を生し頼朝を  
召寄せて京師の守護となさまく欲ま是時し當り  
て平氏南海に在り志をく山陽を侵し掠め灰燼再  
たび火氣或生し稍燃ふんとまる勢ひらるあぞ法  
皇備前守行家も命し平氏と追討せしむ行家も又  
己が功も矜り恩賞嘗て心も満ま不平と懐きて  
在るがう之輓令もま義仲と隙と構え互ひは慢る

蝸牛の角芽だちる折も折平氏追討の命或得る  
胸し一物あるあとも急ぎ京師と進発る平軍と  
室山ふ干と交えしが戦ひ遂に勝利と得る退い  
河内の国も扱て義仲も叛く却説法皇の義仲が暴  
行と厭ひたまふあも益々深く遙し頼朝が温厚篤  
實の風采と景慕したまひ使者を鎌倉も下して頼  
朝を召させらる斯と聞知る義仲の弥増ま憤懣と  
洩れふ由なく豪富と劫らる財と掠め乱暴狼藉至  
らざるも一透と得たる諛者の舌頭かの鼓判官知康



折らそよけれと義仲が謀叛の兆候現れぬと教  
 唆されて法皇の直ち知康と大将と一叡山園城寺  
 の僧兵と徴して義仲と討つむるや義仲は是れと  
 彼が起らぬその間我先づ事と挙るふ如ぞと怒り  
 ふ任する無名の戦争王者と對して弓と彎くべ是即  
 ち朝敵多り止まりたまふと樋口兼光今井兼平も  
 ろともふ切ふ諫むる忠言を聴ぬ剛氣の勇將が死と  
 決りたる声励まり諛者の詞と信用して功なり罪な  
 き義仲と誅せんと企てたまふは是れを鼓判官が劍

よ齊しき舌頭よ迷へせたまふ君が過ち我かの諛者  
 と誅戮し君側の悪を除くまべ我彼よ殺されまん今  
 更猶豫を去さるあは疾押寄せよと烈しき陣殉れ  
 覚期ふして倒々ふ動うがた丈夫の魂ひ義仲  
 自ら真先馬と乗出馳出せば去らばも血氣の  
 迅雄等誰一人励まざらん大将死と決りたまふよ  
 我侪をどて後とんや目み物見せて鎌倉武士の暴膽  
 と挫ひ死懲一遣ん此時なりと七隊の軍兵関を  
 突り鼓を逃まを生捕と武者声たうく罵り騒ぎ直よ



法皇が假宮多（まごみや）法住寺殿（ほつじゆじやうだん）に押寄（おしよ）て十重二十重（じゆじゆにじゆじゆ）の  
 取圍（とりゐ）と短兵急（たんぺいしゅう）に攻立（こうたて）る兵事（へいじ）ふ疎（そ）き知康（ちかう）なれ（な）ば如何（いかう）  
 也義仲（よしかた）の敵（てき）を（を）得（え）ん暫時（せんじ）の防（ぼう）ぎ戦（せん）ひ（ひ）が忽（たち）ち  
 微塵（ゑいじん）の踏破（ふみやぶ）られ乱（らん）生（な）入来（いりく）る北兵（きたへい）の捕（とら）へられ（ら）て  
 一大事（いだいじ）と辛（から）く（く）して岡（おか）と斬（き）抜（ぬ）け鎌倉（かまくら）さ（さ）して逃（に）れ去（き）  
 里ぬ

通日本小史三編卷之上終

010190512873



